教職あらかると

我が師、久保千里先生のこと

2019.12　後藤　忠

久保千里先生とのご縁をいただいたのは 1973 年、初任地の東京都墨田区でした。

誰にとっても出会いはいつも突然やってきますが、その出会いを「縁」にするかどうかは人それぞれ千差万別です。その辺りの話はこの「教職あらかると」の「教職随想」の中に記しましたので、ここでは省きます。

先生とのご縁から 10 年が経ち、師は中野区立新井小学校長を最後に東京都公立学校教員をご勇退されました。

その機会に、先生から薫陶を受け、心から先生を敬愛する者たちが教育者としての先生の生き方についてのお話を是非お伺いしたいと強引にお願いし、道徳指導研究会（通称、道指会）が中心となってその企画・運営を担当しました。

以下はその時の逐語記録です。

久保千里先生ご勇退記念講話　記録

教育とは何かを求めつづけて

昭和５８年(1983 年)７月１６日（土）
世田谷区；大原会館：芙蓉の間
(文責　後藤　忠)

記念講話という大袈裟な題をいただきまして、引き受けてはみたものの「困ったなあ」と思いまして、このような大きな題はじっくり後でまとめてみたいと思いまして、今日は「私の生い立ちの記」を話してみたいと思います。気楽にやります。これはくだらん一個人の話でございまして、何もメモすることもいらないし、本当に気楽に聞き流していただきたいと思います。

私の一生は波乱万丈といいますか、挫折の連続でございました。

生れ落ちてから話をしますと長くなりますので、戦後に限って申し上げたいと思います。昭和 20 年ごろから「私の戦後史」ということで、飛ばし飛ばし申し上げるわけですが、

私は昭和 20 年の 4 月に実は海軍予備生徒というのがございまして、佐世保に学徒動員に行っている途中に受験しまして、合格して４月に館山に入隊しました。館山の海軍砲術学校、その頃神戸村といっていましたが館山市に入っていますね、そこは「鬼の館山」といわれまして、すごいところでしたが、そこで訓練を受けて、空襲に遭ったり、死ぬ目に遭ったりしまして、横須賀に転属になりまして、終戦前は横須賀におりました。大空襲を受けておそらく死ぬだろうと思っておりましたが、奇跡的に防空壕から抜け出すことができて助かったわけです。そこには菊水隊というのがありまして、終戦の 8 月 15 日の詔勅を第一種軍装というのを着まして、手袋をはめて営庭に集まりまして、天皇のかすかな終戦の玉音を聞きました。そのときの何と言いますか、無残な、実に悔しい思い、国破れて山河ありといいますが、もうすべて日本は滅んだんだという実に悲しい悔しい思いをいたしました。それから、菊水隊に入るのが（私も菊水隊に入るつもりでおりましたけれども）幸か不幸か一期遅れまして、前の人たちは特殊潜航艇に乗って全部港から出て行きました。「帽を振れ」という合図で私たちは岸壁に立って

帽子を振って最後の別れをしました。出撃した菊水隊は勿論自爆したわけです。そういうことで、幹部の人達が次々と自決していきまして、私たちも割腹しようとしましたが、何とか押しとどめられて、8月22日に解散になりました。

私は田舎の鹿児島に無蓋貨車に乗って大きな荷物を2つ持たされて帰ってまいりました。途中、広島の原爆の悲惨な跡もこの目で見てきました。また、橋なんかが落ちて、川を渡りながら荷物を片っ方捨てながら、ほうほうの体で命からがらといいますか田舎に帰ってまいりました。それから9月30日まで田舎のお世話になったところでごろごろしておりました。

9月30日付で10月1日から同じ田舎の曽於郡岩川町笠木国民学校、僻地に近いところですが就職いたしました。まあしかし、これから新しい日本再建という大きな希望を抱きながら僻地の学校に勤めました。

この学校の校長というのは東京の学校の校長をされて、池袋第二小学校の校長でございましたが田舎に疎開していたのでございます。実に厳しい人で、毎朝毎朝、職員朝礼を校長室で、7,8人の教職員で直立不動で御真影を拝みながら、あと校長さんの訓話を受けました。しかし、段々、私も若いものでしたから反発する気持ちが強くなってきました。ある時など稲束を持ってきまして「久保、お前はこの稲束の粒は幾つあるか言え」と言う。「そんなのは知りません」「そんなのを知らないで農村の教育は勤まるか」とかですね、様々なことを言われて、まあ、まさにその通りなんですが、答えられずに歯噛みをして悔しがったことも憶えております。しかしその反面ですね、宿直室におりましたが、毎朝4時半か5時に来て戸をドンドン叩いて起こす。そして、「学校内一巡しろ」というわけで従いました。また、一番最初にその校長が「これを読め」というわけで紹介された本が西田幾多郎の「善の研究」でございました。ところが全然何を言っているのか分からない。何が書いてあるのか分かりません。しかし、悔しいものですから最後まで読むだけは読みました。今かすかに心に残っているのは「純粋経験」というその言葉ぐらいなものじゃないかなあと思います。しかし、また読み返してみまして、少しは何か心に残っているものがあるように思います。

その間、新しい新制中学などできてくるわけですが、私は新しい民主国日本、民主主義日本の建設は教育の復興からという合言葉がそのころありまして「よし、これだ！」というわけで、新しい組合運動に青年代表という形で入りました。そして、書記長ということで郡の書記長を1年やりました。この間、ストなどは1回もやった事はありません。校長さんが執行委員長で、私が書記長をやった。執行委員も半数が校長さんでした。そういう中で私どもが、食糧難もありましたけれども、それよりも一番組合運動で目指したのは教育の復興だという事でございました。そのためにいろいろ若気の至りでやったことがございますが、組合はその頃、全教連というのと全教協というのの二つに分かれておりましたが、いわゆる岩間正男さんの率いる一派、これは四谷第五小から始まった、今、前島先生のいるあの学校です。それではなく河野正夫さんという方の率いる穏やかなほうの組合をやらせていただきました。

全国大会なんかや県の大会なんかを招請してやったこともございます。それからコアカリキュラムも始まったころでございまして、石山脩平先生はご存知だと思いますが、私は生意気にも曽於郡にお呼びしまして、コアカリキュラムの研究会を全郡で催したこともございます。まあ、少しはコアカリキュラムの何たるかが分かって、私自身実践はしませんでしたが、かなり実践の輪が広がったことを憶えています。それから書記長を1年で辞めまして、今度は中学校に入りまして、中学の英語の教師をやりました。その頃は英語、国語、数学、体育とか、みんな受け持たされたのですが、2つ目の中学では英語と国語と習字を教えました。そして英語研究会も組織いたしまして、郡内で研修会をやった憶えもあります。

それから組合の機関紙として文芸誌を発刊いたしました。若い先生方が集まって文芸誌を発刊しました。そういう事もございました。

それから失敗したのが、厚生部を作りまして、物のない時代でしたから学用品などを安く供給しようということで厚生部を壮大な規模のもと

作りましたが、武士の商法といいますか、見事に失敗をいたしました。これもまあ専従を置いてやったのですが、どうも採算が取れないという事で失敗だったと思います。

そういうことで、しかし、田舎の教育、田舎にもの足らずに東京に出てみたいという気持ちを（昭和）24 年頃強くもちまして、24 年に一度東京に出てまいりました。

東京で何をするか、実は教員はしたくない、教員にはなりたくない、組合運動というのももう考えなくなりまして、なりたかったのは弁護士か新聞記者あるいは小説家という希望をもっておったわけですが、一回東京へ出てまいりましたけれども、その黒木校長さんというその教え子を紹介されまして、その教え子というのは朝日新聞の重鎮たる偉い人を紹介して、全然学校関係はだめだ、しかも英語の教員を考えていたものですから、多摩にはあったのですが、やめて帰って、25 年に再び上京してまいりました。

江戸川の瑞江に鹿児島の連中が 8 人でごろごろしておりました。その他に若人が 8 人くらい、全部で 16 人くらいいましたかな、そこに転がり込んで、いよいよ東京の生活が始まりました。

江戸川時代はすっぽかしてしまいますが、江戸川では夜学に入って、学校では子どもが好きで、まあ一生懸命、何やったか分かりませんが、遊んだり勉強したりしておりましたけれども、なかなか飽き足らない気持ちがつのりました。また、夜学に通って法律の勉強を始めましたけれども、だんだん焼き鳥屋の味を覚えまして、途中まで行って U ターンするという繰り返しになってしまいました。小川町まで行くのですけれども、小川町に屋台が並んでいて、そこへ飛び込んで焼酎飲んでお湯割り飲んで、焼き鳥食べていい気分になって、学校はそこにあるんですが、そこまで行かないで、そういう繰り返しで、とうとう弁護士を諦めて司法試験を受けませんでした。

しかし、卒業だけは同級生に鹿児島の連中もおりましたし、私の後輩に中大出の同級の真面目な男がおりましたし、今中野区で教頭をしておりますけれども、これは非常に毎日学校へ行ってしっかりノートをとっているものですから、試験前に「ノート貸せ」と言って借りていって、何とか試験を受けて合格して、その本人より私の方が成績がよかった。そういう事で卒業だけはできました。しかし、もうそのときにはすでに「私は教員でしか生活できない」という気持ちになっておりました。そして、江戸川ではお山の大将みたいな気持ちでおりましたけれども、それにも飽き足らなくなりまして、墨田に移ってまいりました。

昭和 33 年に移って参りました。これも 2 年越しの念願が叶ったわけですが、実は私の希望した学校ではなくて東吾嬬小学校というところに配属になりました。

ここは私の本当に教育の転機といいますか、人生の転機になったところでございます。それまでは本当にふしだらで何をやらかすか分からない人間でありました。何回も申し上げていると思いますが、私は「でもしか先生」でしかなかった。仕方がないから教員になった。

しかし、今度はひとつ「これでしか飯は食えないんだ!」という覚悟を決めて、この東吾嬬小で目を開かされた。どういうことかと申しますと、ご承知の通り、道徳教育、「道徳」の時間が特設された年でございます。これはもう古島稔先生との出会いが一番大きいわけでございますけれども、この東吾嬬小学校が墨田区の第 1 回の道徳教育研究指定校を引き受けたわけでございます。このときの校長さんが大塚という校長さんで、この方はすでに葛飾の小松小学校時代から道徳の全国研修会に派遣されていた方でございますが、この方は実に強い性格といいますか、頑として聞かないといいますか、ものすごい反対の中で、道徳教育研究をやるんだということで押し切られました。その心意気というものに私は非常に感銘を覚えましたし、私自身も行き詰った教育観から何か別のことをやってみたいという気持ちから「よし、道徳をやってみよう」という決意を固めました。

その間、学校は荒れ狂うような毎日でございました。毎日、反対反対。勿論私は孤立無援とまではいかないのですが、まあ若気の至りもありまして、組合からの攻撃を全て一人で受けて立つということの連続でございました。「卑怯者さらば去れ。我ら赤旗守る」とかね、ああいう歌を飲む席ではさかんに罵声と同時に私に浴びせてくると

いう事が何度もございました。

しかし、敢然として私はそれに立ち向かい、ついに勤評、学テのときだったかな、組合に脱退宣言をいたしました。職員朝会のときに「組合を脱退する。もうこういう組合にはいられない」と。私は組合運動を否定してはおりません。否定してはいないけれども、絶対こういう組合には付いていけない。日本を亡国に追い込むものだと強い調子で脱退宣言をいたしました。

そうしたら、その翌日 5、6 人の人がずらっと辞めてくれました。2 人の若い女の先生も辞めました。年配の男の先生も辞める。それから私も孤立無援でなくなって、道徳教育の面でもやや積極的に進められるという形が出来上がったのではないかと思います。

その間、今先、言いましたけれども古島先生に鍛えられました。新進気鋭の古島先生が都研にいらっしゃいまして、他の指導主事の先生もいらっしゃいましたけれども、一番影響を受けたのは古島先生でした。喧々諤々、私はまず、道徳は反対だったのです。反対だったのだけれども、だんだん道徳とは何か、生活指導とは何か、教科指導とは、特活とは何かと、いろんな側面でお話を伺ったり、又、議論を吹っかけたりして、あるいは飲んだりして、毎日毎日が実に張り合いのある生き甲斐のある感じで東吾嬬小学校を過ごして参りました。

そうして幸か不幸か、研究員制度が始まった頃に、私は生活指導主任をしていて、そういうことで研究員を希望しましたがだめ。私の前の人がいたわけですね、第 1 回の研究員には津久井という人がいて、第 2 回が室という人が、今日はお見えでないが女の先生で、今、校長さんですが、その人が順番で「じゃあ次に」といったら、校長さんが「お前はもうだめだ。そういう研究員になっちゃいけないんだ」、いけないんだとは言いませんが「学校にいてくれ」というわけですね。40 歳になったときに「それじゃあ、せめて研究生を受けさせてください」と本当にこれはお願いしたんですけれども、校長さんはどうしても受けさせてくれない。もうしゃくにさわってしゃくにさわってしかたがない。だからというわけではないが、この西川猛先生を中心とする宮田丈夫先生が指導していらっしゃる学級経営の会にもご紹介を得て入らせてもらいました。こういうところで勉強をしてがんばってみようという事で、40 歳になって指導主事を受けさせてもらいました。というのはこれもまた、ひとつの出会いでもある山下康雄という区の指導主事さん、皆さんご存知と思いますが、この方が私を推薦してくださいました。校長さんに「是非受けさせてほしい」、校長はあまり受けさせる気持ちはなかったんですね。ただ学校にいて学校をまとめてほしい、それは大事な事なんだけれども、もっと私は伸びたい、やりたいという気持ちがあったときに山下先生から強く推薦されて、指導主事を受けさせてもらいました。40 歳になったばかりで、一番推薦順位じゃビリなんですね。その頃は推薦制でしたから、一番ビリで受けさせてもらいました。そしたらビックリしたことに第 1 回受かりました。1 次試験だけは受かったわけです。ところが 2 次試験はお呼びでない。この繰り返しを 4 回やったことはいろいろなところでお話してご承知の事と思いますが、まあ、最後は投げ出して、また赤旗でも振ってみようかなあという感じになりましたが、それをいろいろ支えてくれた皆さん、先輩方が「もうちょっとやれ」ということで 4 回目にやっと板橋区にお呼びがかかったということが私の指導主事のきっかけでございました。

こういう詰まらん話ばかりしておりますけれども、この間、ここにお集まりの皆さん方にはいろんな面で支えていただきお世話になり、又一緒に勉強した方々ばかりございます。お一人お一人についてたくさん印象が残っているわけですけれども、それは又後ほど飲む機会等でお話ができるのではないかと思います。

それからもうひとつ、十人会というのがございまして、これは（東大の）佐藤俊夫先生の会でございまして、これも学級経営の会と道指会と十人会とがメンバーがダブっているのですね。これも道徳倫理、習俗ということで勉強させていただきました。これも古島先生の肝煎でできた会でございます。西川先生とか種市さんとか宍戸さんとか･･･みんな大体ダブっていますね。この会では道徳とは何か、人間の生き方とは何かということを強く勉強させられました。倫理学と習俗の問題

とか、あるいはカントの実践理性批判の勉強をしてみたり、風姿花伝書の勉強をしてみたり、幅広く人間に関する勉強をさせていただきました。これも私の心の支え、道徳を担当する指導主事としてのひとつのバックボーンみたいな形になっていったんじゃないかと思います。和辻哲郎先生の文章に接したり柳田国男さんの著書に接したりですね、非常に楽しく勉強させられた思い出が残っております。

まあ、こうして私は板橋区では自称、いや公称ですが「酒童主事」だということを初めっから名乗りました。まず飲んで、楽しい話をしたり騒いだり、それを通しました。まともな指導はできないものですから、皆さんと仲良くして、板橋時代が一番懐かしくて充実していたような感じがしております。生活指導、道徳、特活、学級経営、それから特殊教育も担当しました。それに教育相談も担当しました。教科指導以外は全部担当しました。教科指導は担当しておりません。そこでも、やっぱり人間とは何かと、どういうふうに子どもを育てていったらいいかという中心の勉強を互いにしてきたのだと思います。

非常にすーっと何十年ばかりの話を表面だけ過ぎてしまいましたが、私が今までにたくさんの好きな言葉、格言とか学んできておりますが、一番私の心に強く焼き付いて離れないのが『教育とは愛を食べさせることである』これが一番私の脳裏から離れない言葉でございます。これは学級経営に首を突っ込んだ頃からではないかと思いますが、とにかく「愛を食べさせることだ」これは森田宗一さんという方が先に書いたこととは思いますが、これは誰かの言葉なんですねえ、今思い出せませんが。非行少年とか情緒障害を起こしている子どもたち、今教育相談所に入ってあらためて思うのですが、非行少年や鑑別所に入った子どもたちが異口同音に言っている言葉が「親たちが俺をかまってくれなかった。本気になって叱ってくれなかった」とかですね「礼儀作法も教えてくれなかった。基本的行動様式も教えてくれなかった。だから俺はこうなっているんだ」ということを言っている。愛をかけてくれなかった、本当の愛をかけてくれなかった。この情緒障害の子どもたち、登校拒否とか、種々様々な暴力行為、非行とか、そういうのを見て根本にあるのが愛情の欠乏による情緒障害、情緒が正しく育っていない、安定感がない、あるいは感情というものが麻痺してしまって、そういう愛、「出発は愛にあり愛に帰結する」というふうに私は感じております。

もうひとつは「教育は印象である」という言葉もある。私たちは今まで小学校からずっと教育されておりますが、まともに国語、算数とか理科とか教わったのを思い返せばないことはないのですが、あの時先生から褒められたとか、ある時強く注意されたとか、ふとしたときに本当に先生が声をかけてくれたとか、お弁当を一緒に食べたとか、そういうことが心に残っているものですね。ですからそういうときの印象を子どもに強く与える、いい印象を強く与えるという事が大事ではないかと感じております。

それから、「脚下照顧」とかですね、「啐啄同機」、「柳は緑、花は紅」、「柳に雪折れなし」これは指導主事になってから教わった言葉です。学校経営に関係があります。「人間は自己を目的とし、自己を手段とするなかれ」これはカントの言葉ですね。それから、芭蕉の句ですが「よく見ればなずな花咲く垣根かな」これは人間の心象風景を歌った歌だといわれています。非常に意味の深い俳句だと思います。それから「敬天愛人」これは鹿児島の西郷どんの言葉でございます。それから「舎利子よ、空即是色花盛り」まあこういう古い言葉もございますが、時間が来ましたのでこれで終わりますが、本当にくだらんお話をただ表面をかき混ぜただけでございまして、座興に供したわけでございます。失礼いたしました。

（久保千里先生は平成14年2月3日 享年79歳で惜しまれつつご逝去されました。ここに再び慎んで哀悼のまことを捧げます。ありがとうございました。）